

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 8 月 29 日現在

機関番号：32718

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K01645

研究課題名(和文)「共創するファシリテーション」理論の構築と現場への活用

研究課題名(英文)Construction of "co-creative facilitation" theory and utilization in the field

研究代表者

西 洋子 (NISHI, Hiroko)

東洋英和女学院大学・人間科学部・教授

研究者番号：40190863

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：共創の社会実践では、これまでのリーダー型とは異なるファシリテーション技術が求められる。それは、参加者の差異を創造性の契機として未知の手法や価値の創出を促すファシリテーションである。この研究では、我々が東日本大震災以降、被災地で継続してきた身体での共創表現ワークショップを研究のフィールドとし、長期間の実践の映像記録やファシリテータとの対話の記録を対象に、「共創するファシリテーション」の動態を明らかにし、新しいモデルについて検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

共創は時代的キーワードとして注目を集め、企業・行政・NPOなど異なるセクターの人々が取り組むプロジェクトに多く用いられる。こうした社会実践では、差異を同一化せずに、各々が個性的かつ創造的となる現場を支える新しいファシリテーションが重要となる。本研究では、東日本大震災以降、被災地で継続している身体での共創表現ワークショップを研究フィールドとし、長期的な映像記録や参加者との対話から、多様な人々の表現の容や重層的なネットワーク構築が基盤となって、実践自体が社会へと拡大・深化を続けるオープンエンドでダイナミカルな「共創するファシリテーション」モデルを実践の現場を通して検討することができた。

研究成果の概要(英文)：In co-creation social practice, facilitation techniques that are different from the conventional leader type are required. It is a facilitation that encourages the creation of unknown methods and values by using the differences of participants as an opportunity for creativity. In this research, we set the field of research on co-creation expression workshops with the body that we have continued in the disaster area since the Great East Japan Earthquake, and targeted video recording of long-term practice and dialogue with facilitators. We clarified the dynamics of "co-creative facilitation" and examined a new model.

研究分野：共創学，身体表現論

キーワード：共創 ファシリテーション 身体表現 創造 ワークショップ 社会実践

1. 研究開始当初の背景

「共創」は、時代的キーワードとして注目を集め、最近では企業・行政・NPO など異なるセクターの人々が各々の立場から叡智を集めて取り組むプロジェクトには必ずと言ってよいほど「共創」が用いられる。研究代表者の西(身体表現論)は、過去 20 年あまり、教育機関やコミュニティ、病院や福祉施設等において、障害児・者を含むさまざまな人々による身体での共創表現を継続し研究を進めている。また、研究分担者の三輪(工学)は、我が国における「共創」研究の第一人者であり、2000 年には既に『場と共創』(NTT 出版, 2000) を著し、共創とは「背景や価値観の異なる多様な人々が、願いや夢を共有して一緒にそれを実現する創造的活動である」と定義している。

「共創」という言葉からは、人々が協力し合って活動する柔らかな関係性が想起される。しかし、異質で多様な人々が共にある実践の現場では、多くのズレや摩擦が生じる。共創では、こうしたズレや摩擦を調整したり同一化したりはせず、違いは違いのままとして、差異が創造性の契機となって未知の手法や価値が創出することを目指す。その意味で「共創」は、極めてダイナミカルであり、異質性や多様性を前提としつつも予め設定された課題を遂行する「協働」とは一線を画する概念である。

私たちの身体は、異質性や多様性の源であり、ズレや摩擦に無意識も含めて繊細に反応するセンサーである。申請者らは、「共創」に不可欠な身体性を取り込んだ「身体での共創表現」の社会実践モデルとして、2012 年 12 月から東日本大震災の被災地の宮城県石巻市と東松島市で共創表現ワークショップ「てあわせ」を開始し、現在も継続中である(図 1)。「てあわせ」とは、自己と他者とが手を合わせ、身心の能動と受動を交錯させて即興的に表現を創り合う行為であり、西の表現実践の中核である。2012 年 12 月の開始時から本研究構想時までの被災地での「てあわせ」は 68 回のぼり、延べ 3,500 人以上が参加している。主な参加者は、被災した重度自閉症等の発達障害児・者と家族、現地の教育・福祉関係者、一般市民であり、年齢や性別、障害の有無、言語使用・被災経験・表現経験等の差異は非常に大きい。したがって、本ワークショップの参加者にみる異質性と多様性の幅は、共創表現の社会実践モデルとして際立っており、「共創」研究のフィールドとしての希少性は極めて高いといえる。

また申請者らは、「共創」の科学的解明のために、2008 年より「てあわせ」を共創表現のミニマムモデルに据え、一軸の計測装置を開発してダイナミクスを解明する研究(図 2)を展開している。この研究では、共創表現では意識に上らない身体全体の動きが双方の手のひらの動きに時間的に先行することや、手のひらの動きのリターンマップにカオストラクタ的構造が存在することを見出した。

さらに 2012 年には、エピソードの質的検討とモーションキャプチャでの現象的検討から、表現の深化に伴う 5 つのモードを抽出しモデル化した(図 3)。



図 1. 被災地でのてあわせワークショップ

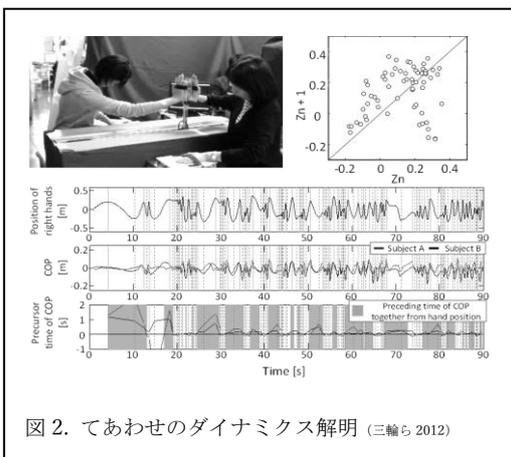


図 2. てあわせのダイナミクス解明 (三輪ら 2012)

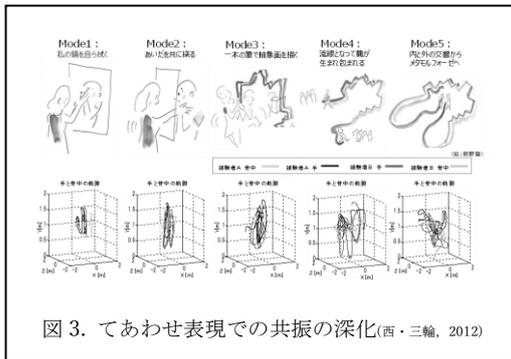


図 3. てあわせ表現での共振の深化(西・三輪, 2012)

2. 研究の目的

これまでの科学研究と被災地でのフィールド研究を通じて、申請者らが掴んだ最も重要な事実は、活動の長期化に伴い、とすれば「協働」へと収束しそうな現場を、常にオープンエンドでダイナミカルな「共創」へと展開し深化を続けるためには、全ての参加者が異なるはたらきを通じて「共創」に参画することを促し支える「共創するファシリテーション」が最大の鍵になるということである。この「共創するファシリテーション」は、何よりもまず、ワークショップの現場での参加者個々の身体的実感から築かれていくものであり、ファシリテータはそれを促し支える存在である。そのはたらきは、ワークショップの進行をファシリテータが主導するような従来型のファシリテーションとは全く異なる。しかし、「共創するファシリテーション」は経験

知の範囲にとどまり、長期的な実践を通じたダイナミクスの検討とその解明は未だなされていない。したがって、現状では、「共創するファシリテータ」（「共創するファシリテーション」を促進する者）の育成モデルや評価指標は未整備である。

申請者が平成 27-28 年度に挑戦的萌芽研究で試みた「身体での共創表現におけるファシリテータのはたらき」の質的研究では、「共創するファシリテーション」の構造とダイナミクスは、ワークショップでの「てあわせ」の集団形成およびファシリテータや参加者へのインタビューの言語ネットワーク構造に顕在化するのではないかと推定を得た。そこで本研究では、挑戦的萌芽研究の試みを一層発展させ、長期間の実践の映像記録を対象とする「共創するファシリテーション」の実態の検討と参加者やファシリテータ経験者へのインタビュー等を通じた質的研究および、活動自体の変容から「共創するファシリテーション」のモデル化を試みる。

3. 研究の方法

(1) 身体での共創表現ワークショップ「てあわせ」の実施

本研究を進めるにあたり、2012 年から東日本大震災の被災地である宮城県石巻市と東松島市で実施しているてあわせ表現ワークショップを継続し、映像データの収集・蓄積を行う。同時に、参加・ファシリテータと「共創するファシリテーション」に関するインタビューや対話を継続的に行う。

(2) 長期間の実践を通じた「共創するファシリテーション」の実態の検討

被災地での「てあわせ」の全ての回の映像記録とインタビュー記録および、本研究で新たに加わる映像記録とインタビューや対話の記録を対象に、ワークショップの継時的変化を検討し、「共創するファシリテーション」の構造とダイナミクスを長期的視点から検討する。その際には、『身の構造』（市川浩, 青土社, 1993）に示されるツリー、セミ・ラティス、多次元ネットワークの 3 つのシステム（図 4）を適用して考察し、これらとの異なりから「共創するファシリテーション」のモデルを推定する。

(3) 「共創するファシリテーション」におけるファシリテータの具体的はたらきの検討

上記（2）での検討結果と共創表現のモード変化（図 3）を照合し、モードの移行を促し共創を促進・進化させるファシリテータの具体的はたらきについて、映像を質的に検討することで明らかにする。

(4) 「共創するファシリテータ」育成講座での適用

上記の（2）、（3）より「共創するファシリテータ」の育成モデルと評価指標を考案して、ファシリテータ育成講座に適用するとともに、モデルの妥当性を現場で検証する。

4. 研究成果

(1) 被災地での身体での共創表現ワークショップ「てあわせ」の実施

2017 年度～2018 年度は当初の研究計画通り、被災地での身体での共創表現ワークショップ「てあわせ」を各年 10 回、計 20 回実施することができた。また、2019 年度も同様に 10 回のワークショップを予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響で、2 月と 3 月のワークショップは中止となり年間 8 回の実施となった。研究代表者の西は、これまでのファシリテータの立場から参与観察者の立場への完全移行を目指したが、現地運営組織の希望もあり、ワークショップの一部はファシリテータ役を務めながら、多くは参与観察を行った。研究期間を延長してさらなるデータ収集を行う予定であった 2020 年～2021 年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、「てあわせ」ワークショップの実施に大きな変更が生じた。緊急事態宣言が発出された 2020 年の 4 月から 6 月は、予定していた対面での WS はすべて中止の措置をとり、そのかわりに、オンラインのサイトに 30 名程度の参加者が 20 秒程度の「てあわせ」の動画を送り合う「てあわせ・レター」を関東の関連団体との交流として継続的に実施した。この試みでは、170 本あまりの動画と多くの写真を収集することができた。2020 年の 7 月以降は、講師を招いての Zoom での学習会や対面での現地ミーティングは実施できたが、感染予防の観点から直接的な身体接触を伴う「てあわせ」ワークショップについては中止とした。

(2) 長期間の実践を通じた「共創するファシリテーション」の実態の検討

① ワorkshopでの共創表現場面でのファシリテーション

2017～2019 年度に対面で開催したワークショップでは、参加者が自由な「てあわせ」を行う「てあわせ・のはら」場面を中心にビデオ撮影を行い、映像記録を収集した。「てあわせ・のはら」場面での個々の参加者および参加者とファシリテータの関係性について、これまでの研究で明らかとなった集団の位置計測の解析結果を参照しながら考察を深めた。結果として、新たにファシリテータ役を担う者は、自分が直接かかわる個人や小集団内へと意識が向き、その範囲でのはたらきかけは実現できている場面が多く認められた。一方で、変化し続ける参加者全体の動態

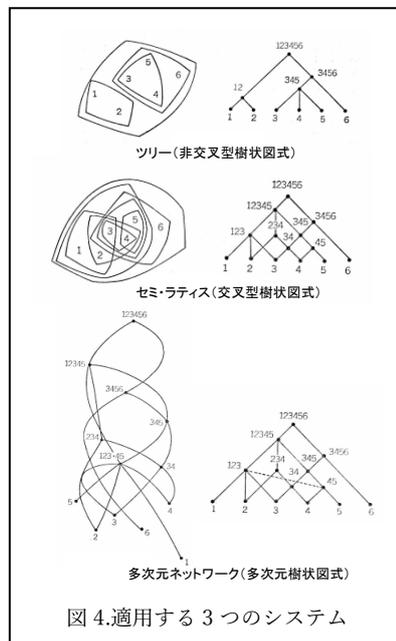


図 4.適用する 3 つのシステム

を捉え自身が移動しながら表現を促すことや、小集団として固定化した境界を崩し新たなつながりや表現を促すようなはたらきかけは極めて薄いことが明らかとなった。あわせて、会場内で表現を行わない参加者へのはたらきかけの頻度は、ワークショップ前後や休憩時も含めて極めて低いことが見いだされた。

②新たにファシリテータを担う現地ファシリテータとの対話

研究計画では、新たにファシリテーションを行う現地ファシリテータを対象にインタビュー調査を実施する予定であったが、プレ調査を通して、言語化することでファシリテーション自体が強く意識化され、ワークショップでの言動が恣意的になる危惧が生じたことから、個別インタビューの代わりに、毎回のワークショップ終了時のコメントやこれまでのワークショップでファシリテーションを行ってきた研究代表者（西）との対話、ファシリテーション勉強会での討議でのファシリテータ相互の対話等から、新たにファシリテータを担う者がどのような点を課題として捉えるのかを検討した。結果として、新規のファシリテータはいずれも、言葉がけの詳細への意識が高まる点が特徴的であることが明らかとなった。一方で、WS参加者全体や、参加者としてWSの流れとして実感される動態を、ファシリテーションを行いながらどのようにつかんだらよいのか、その動態に対して自身の身体でどうかかわればよいのかに関連する事柄を共通の課題として捉えていることが見いだされた。

③長期間での共創表現ワークショップ「てあわせ」の社会的変容

2017年度は月に1回の定例ワークショップの実施と8月のファシリテーション勉強会が主な活動であった。2018年度は、定例ワークショップのほかに、現地メンバーがファシリテータとなって外部団体との交流ワークショップを行う機会が年間5回もたれた。ここでは、発達障害児・者等を含む現地メンバーがファシリテータの役割を担う場面が認められた。加えて、数名の現地メンバー（主に保護者）が、地域の生活介護施設で新たな共創表現ワークショップをはじめるといった、予定にはなかった新しい実践が行われた。2019年度は、現地メンバーが中心となって「てあわせ」ワークショップを継続・発展させるために、身体表現を専門とする者でもなくても実現可能な新しいファシリテーションの手法の検討が積極的に行われた。実践現場での試行錯誤を通じて、短い時間帯で次々とファシリテータを交代する「ファシリテーションリレー」という新しい手法や、多くの独自性の高い表現題材が見出された。こうした取り組みを通じて、ワークショップの現場では、重度の障害のあるメンバーがファシリテーションに挑戦するなどの大きな変化が生じた。また、現場から生まれた新しいファシリテーション手法を用いて、現地メンバーが主体となって外部団体との交流ワークショップを年間数回行った。12月には他県の団体との交流や仙台での100名あまりの参加者によるワークショップ等を実現した。2020～2021年度は、新型コロナウイルス感染症のため対面でのワークショップを行うことができないという制限された実施状況ではあったが、現地メンバーのファシリテーションへの関心は非常に高く、オンラインでの表現交流である「てあわせ・レター」やオンラインでの学習会を通じて、「共創するファシリテーション」に関するさまざまな疑問や意見の交換が積極的に行われた。

(3)「共創するファシリテーション」のモデル化

上記(1)、(2)での実践現場の長期間にわたる展開の実態から、「共創するファシリテーション」においては、既存のワークショップとその枠を社会へと広げた新たな実践は、ファシリテータ育成の場として機能しているとまとめられる。本研究の目的である「共創するファシリテーション」のモデルの検討に際しては、定例のワークショップを継続することでの表現の体験とその深化および、ワークショップ内での多様な関係性の構築が基盤となり、実践自体が社会へと拡大・深化を続けるようなオープンエンドでダイナミカルなモデルを考えることが重要であることを掴むことができた。つまり、本研究開始時にモデル化検討のための基礎資料とした市川の『身の構造』で示されたツリー、セミ・ラティス、多次元ネットワークの各構造は、身体での共創表現ワークショップという実践現場内には見られるものの、「共創するファシリテーション」のにとって重要であるファシリテータ個人と小集団を超えようとする身体のはたらきのすべてをカバーしているわけではないこと、また、他の団体との交流や社会的広がりに伴う新たなファシリテーションの経験といった、実践現場自体が社会へと拡大していく動態からは、これまでは外部であった要因とどのようにかわりを創り出していくのかが大きな鍵であり、そうした要素を含むモデルが必要となることが明らかとなった。それは、てあわせ表現での共振での深化において、既に身体に起きていることでもあり、その意味で、ワークショップ自体がひとつの身体となって、他の社会実践とどのような新たな表現を創造していくのかが、「共創するファシリテーション」であると結論づけることができる。

こうした試論をさらなる現場でのデータの積み上げと、新たなファシリテータ育成講座で2020～2022年度は、新型コロナウイルス感染症が収まらず、石巻市、東松島市での発達障害児とその家族、地域の人々等を対象とする「てあわせ」ワークショップの対面での実施は、年間を通じて十分には行えなかった。また、新たに加えた共創表現の実践/研究フィールドも、殆どがオンラインでの表現交流やZoomでのワークショップ開催となった。このような制限されたワークショップ実施状況であったことから、2021年度は、これまで収集したデータ（映像や感想の自由記述等）やファシリテータ育成講座等での討議内容の記録等を再検討することと、オンライ

ンでの表現交流やワークショップの双方を比較検討しながら、ファシリテータの言葉かけや視線、立ち位置等に関する直接的な事柄と、ワークショップ全体のダイナミクスの身体での感受等を中核とする直感的・感覚的な事柄の双方から「共創するファシリテーション」の理論化を試み、原著論文の執筆を進めた。③現場での検証：これまで見出された「身体での共創表現におけるファシリテータのはたらき」に関する研究成果より、ファシリテータの育成モデルを考案し、対面での実践へとつないで、育成したファシリテータの変容から理論の検証を行う予定であったが、ファシリテータが行うことができた共創表現ワークショップは、いずれもオンライン(Zoom)開催となり、特殊な社会状況によって現場での検証は十分とは言えない結果となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 西洋子	4. 巻 Vol.1
2. 論文標題 共創するファシリテーションのダイナミックレイヤ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 共創学	6. 最初と最後の頁 pp.13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西洋子	4. 巻 Vol.3-1
2. 論文標題 表現する身体と非同期の世界	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 共創学	6. 最初と最後の頁 pp.28-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 3件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西洋子
2. 発表標題 共創するファシリテーションのダイナミックレイヤ(3)-ことばからはじまる-
3. 学会等名 共創学会第4回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西洋子、三輪敬之
2. 発表標題 共創するファシリテーションのダイナミック レイヤ(2)
3. 学会等名 共創学会第3回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸田祥子、今野祐子、佐々木浩一、西洋子、三輪敬之、郡司ペギオ幸夫
2. 発表標題 私たちはなぜ新しい”のはら”へと飛び出したのか-石巻・東松島「てあわせ」ワークショップの新しいステージ
3. 学会等名 共創学会第3回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西洋子
2. 発表標題 共創するファシリテーション - 渚にあそぶ-
3. 学会等名 共創学会 第8回共創学研究会 内と外-共創学を耕す- (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西洋子, 大川日向子, 三輪敬之
2. 発表標題 共創するファシリテーションのダイナミック・レイヤ
3. 学会等名 共創学会第2回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大川日向子, 海老沼寛乃, 西洋子, 三輪敬之
2. 発表標題 あなたは表現で深化するか -共創表現ファシリテーションを考える私たちの記録-
3. 学会等名 共創学会第2回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西洋子・三輪敬之
2. 発表標題 身体的共創から社会的共創へ - 宮城県石巻市での「てあわせ」ワークショップの5年
3. 学会等名 第27回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 三輪敬之・西洋子
2. 発表標題 共創に他者は必要か-実践と理論のあいだ（1）
3. 学会等名 共創学会第1回年次大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西洋子・三輪敬之
2. 発表標題 共創に他者は必要か-実践と理論のあいだ（2）
3. 学会等名 共創学会第1回年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森雅彦・今野祐子・西洋子・三輪敬之
2. 発表標題 私たちはなぜ、てあわせ表現ワークショップに集うのか -石巻・東松島からのメッセージ-
3. 学会等名 共創学会第1回年次大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	三輪 敬之 (MIWA Yoshiyuki) (10103615)	早稲田大学・理工学術院・名誉教授 (32689)	
研究 分担者	郡司 幸夫 (GUNJI Yukio) (40192570)	早稲田大学・理工学術院・教授 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------